ししいろのまゆ

西尾　秋乃

朝起きると、父はカマキリに、母は蟻人形になっていました。

どこから話しましょうか。巷に溢れる文学作品というやつとは違って、一々わたしのような小娘の半生を振り返る必要もないでしょうね。とりあえずは今日の始まり。いつもと同じ、何気ない日常であったはずの今日という日の始まりから。

師走も半ば、この日もわたしは覚醒の感覚とともに身を包む寒さに、芋虫のように体を丸め、ベッドの中を蠢き、やがてそれにも倦み、もぞもぞと這い出るのでした。受験生なんだから、とこの時期に遊びに行くことを許さないくせにその受験生の部屋に暖房を導入しない両親を呪いながら、白い吐息で両手を温めたりもしつつ制服のブラウスに袖を通しました。ひんやりとした感触が肌を滑り、背筋を快感とも不快感ともつかない、なんともいえない電流が走りました。

制服の上にダッフルコートを羽織り、カバンを片手に部屋を出ますと、階下からは味噌汁の匂いが漂ってきました。わたしとしては今日のような寒い日の朝はポタージュスープで体の中を温めたりなどしたいものなんですが、文句を言ったり無言で買い置きの粉末のスープを淹れたりして無駄な口論を巻き起こす気にはなりません。楽しいことが待っているとは思えない一日であるとわかってはいても、そんな不愉快な現実をわざわざ自分から作り出す気など、毛頭ございませんから。

ダイニングへのドアに手を伸ばすと、胸の奥底がじわじわと蝕まれてくるような気がしました。それはまるで緩慢な自殺をするかのような気分とでも言えるのではないでしょうか。いえ、

それはきっと紛れもない事実なんでしょう。わたしの人生は死へ向かうためにあるのです。毎日、自分が薄皮一枚ずつ削り落とされて、その何分の一かのペースでゆっくりと再生して。

ダイニングに入ったとたん、一層強く香る味噌汁の匂いと暖房で暖められた空気に体を撫でられる。そして、それと同時にわたしの内側は液体窒素を振りかけられたように凍り付いてしまったのです。

ダイニングテーブルには成人男性大のカマキリが席に着いて新聞を読んでいました。カマキリは父のグレーのスーツに身を包み、父のマグカップの取っ手に鎌の切っ先を引っかけて器用にお茶を飲んだりなんかもしています。カマキリは、ドアを開け放したまま立ち尽くしているわたしに、「おはよう、寒いからそこを早く閉めなさい」と言いました。父の声です。ああ、父はもしかしてこの巨大なカマキリに食べられてしまったのでしょうか。そして、声を、体格を、生活を、人生を乗っ取られてしまったのでしょうか。

なんて奇妙な夢なんでしょう、などと考えることができればどれほど気が楽になったことでしょうか。しかし、覚醒の感覚とともにわたしを襲ったあの寒気が、すでにわたしを夢の世界からは完璧に連れ出していました。ああ、わたしのような小娘が、この非現実的現実にどう抗えると言うのでしょうか。

「あら、今日は早いわね。今起こしに行こうと思ったのに」

母の声です。キッチンの奥からこちらに近づいてきているのがわかりました。ふと、自分の心に広がる安堵感が無性に腹立たしく感じました。女であることを放棄したようにぶくぶくと醜く肥えたあの女に縋ろうとするほど自分は無力なんだというこの現実に、いやそれとも、わ

たしをそこまで追い込んだこの現実に、わたしは怒りとも憎しみともつかぬ感情を抱いたのでありました。

しかし、まあ、なんということでしょう。

もしかしたら、とは考えてはいました。もしかしたら、母もカマキリになってしまっているのかもしれない。いえ、カマキリではなくても他の、そう、例えば巨大なテントウムシなんかになっているかもしれない。己の無力さを思い知らされたこの現実の前に、わたしはどこまで悲観的であっただろうと、今でも思います。しかし、世界はどこまでも残酷で、わたしの絶望はむしろ希望であったかのように思えてしまうほどなのでした。

母は蟻人形になっていたのです。

ああ、蟻人形と言ってもご理解いただけないでしょうね。マネキンです。あの醜く肥えた母の体が嘘のようにほっそりとしたスタイルの、透明なマネキンになっていたのです。そして、その中には無数の蟻が重力を無視したように蠢き回っているのでした。ざわざわざわざわ。

母を、目の前の蟻人形を見た瞬間、わたしの体を蟻が這い回っているかのような気がしました。母の足元から蟻が漏れ出したりしているのだろうか、と思わず床に視線を遣りましたがそうではないようです。蟻の行列を見たときに引き起こされる視覚的な嫌悪感。それが圧倒的な質量と存在感を持って目の前にいるのですから視線は自然とそちらに引き寄せられ、その都度自分の中でなにかがざわめくような感覚に翻弄されるのでした。

「なにボーっとしてるの？　もう朝ゴハンは出来てるんだから早く食べなさい」

蟻人形が母の声でわたしに呼びかけてきました。わたしはただ流されるままに席に着き、目

の前にいるカマキリと蟻人形の存在に怯え、惑い、そして、自分の中に暴れ回る叫びへの衝動と戦うのでした。

わたしが席に着いたのを確認してからカマキリは器用に新聞を折りたたんで、いただきます、と手を合わせました。この気の遣い方は昨日までの父と同じで、わたしは改めてこのグロテスクな現実に自分の日常が飲み込まれてしまったことを思い、泣き喚きたくなりました。しかし、泣き叫ぶことも逃げることもできないままわたしもいただきます、と静かでなんとも気色の悪い朝餉の席に加わるのでした。

カマキリは、どうやってかはわかりませんが、箸を、まるで鎌に吸い付いているかのように器用に扱って鱈のホイル焼きを食べていました。唇がないその構造のせいで食べ物が口中に吸い込まれていく様子が見えてしまいました。そのいかにも昆虫的な口の動きがどうにも不愉快で、わたしは思わず蟻人形に視線を移してしまいました。しかし、その蟻人形に至っては、透明なために咀嚼どころか飲み込んだものが体内へ落ちてゆく様まではっきりと見えてしまうのでした。蟻人形の体内に飲み込まれた食物には大量の蟻が群がり、あっという間にそれらを貪り尽くしてしまうのです。

全身が総毛立ち、腹の中をモノとも感情ともつかないなにかがぐるぐると蠢くのがわかりました。思わず椅子から立ち上がると、カマキリと蟻人形がこちらに視線を向けてきました。

「どうしたの？」

蟻人形が問いかけてきました。声色には不機嫌さが表れ、体中を蟻が激しく動き回り隅々まで真っ黒になっていました。

「今日早いんだった。ごめん、もう行くから」
嘘です。ただの出任せ。一刻も早くこの空間から逃げ出したくて自然と口からこぼれ出た言葉。いつもは無視していたのにわざわざ答えてしまうなんて。しかも、「ごめん」ですって。こんな弱い言葉を吐いてしまうほど、このときのわたしは無力だったのです。
「気を付けて行くんだぞ」
カバンを持って、急ぎ足でダイニングを出るわたしの背中にカマキリが声をかけましたが気付かなかった振りをして、ドアを閉めました。わたしとあの忌まわしい空間はたとえ一時的であろうと遮断されたのです。しかし、下腹部の辺りに居座るあの不快感は未だ拭われず、私はこの家からも逃げ出そうと、靴を履き切らぬうちに玄関から飛び出しました。
下腹部の違和感はやがて痛みとなり、パンクしそうなわたしの脳味噌は悲鳴を上げこの不快感を吐き出させようとしていました。この苦痛を、今日という日の出来事を、すべてを忘れたくてわたしはがむしゃらに走り出しました。

どれだけ走ったのでしょうか。息が上がり、わたしは電柱に身を預けるようにして蹲りました。吐き気は相変わらずで、頭もがんがんと痛みました。頭の中で金属がガチャガチャとかき回されているかのような音が響き、もしかしたらそれはわたしの頭には何匹ものコオロギが詰まって休みなく鳴いているからなのではないかという絶望的な妄想が頭をよぎりました。そんなはずはない。そう信じつつも、どこかで自分がこの非現実的現実の枠組みの中に囚われているのではないかという不安はわたしの中から一向に立ち去る気配を見せません。じっと、腹部

を押さえている自分の手を見ました。紛うことなくヒトの手です。でも、それさえもただのまやかしにしか感じられませんでした。わたしの意思がそう望んでいるだけなのではないか、そう見えているだけで、わたし自身が実は巨大なコオロギだったり、透明な頭蓋骨の中で大量のコオロギが鳴いていたりするのではないだろうか。それとも、あの女のように蟻人形なのかもしれない。

蟻人形の姿が頭をよぎった瞬間、猛烈な吐き気がわたしを襲いました。胃を駆け上がるその不安と絶望の奔流に、わたしは口を押さえることもかなわずただその身を支えるべく電柱に手をつくことしかできませんでした。びちゃびちゃと汚らしい水音がアスファルトに響きました。吐瀉物が靴やスカートを汚すのを皮膚に感じながら、わたしはしばらく目を閉じたまま、力なくむせ、喘いでいました。

呼吸も落ち着いた頃にわたしは恐る恐る目を開きました。足元に広がる吐瀉物にはコオロギもアリも、虫の一匹もいませんでした。頭痛も、頭の中に響くあの忌々しい金属音もいつの間にやら消え去っていました。

わたしは、このとき初めて自分が人間であることを認められたような気がしました。

しかし、わたしは人間であっても父と母がカマキリと蟻人形であることは変わらぬ事実、逃れられぬ現実で、それが空っぽになったわたしの胃をきりりと痛めるのでした。わたしは人間である。その事実は確かにわたしにとって救いでした。しかし、それならばただの人間であるわたしはこの無慈悲で残酷な、非現実という形を持って表れたこの現実にどうやって立ち向かえばいいというのでしょうか。新たな救いを、この現実を打破するなにものかを必死に求めま

した。しかし、わたしがこれまでに触れてきた様々な経験も知識も、モノも人も、すべてが頼りなく、ただ絶望を覚えるばかりなのでした。

とにかく口の中に残る苦味がなんとも不愉快で、わたしはひとまずどこか落ち着ける場所でじっくりとこの先への対策について考えようと思い立ち、ゆっくり立ち上がると口内の胃液を吐き捨てどこへともなく歩き出しました。

しばらく歩くと、砂場しかない殺風景な小さな児童公園を見つけたので、ベンチの脇の蛇口で口をゆすぎ、ハンカチを湿らせてスカートの汚れを取り除くと、これ以上はどうにも動くことはできず、そのままベンチに腰をかけました。寒風に体を震わせながら何気なくきょろきょろと辺りを見回すと、元は白かったであろう薄汚れて陰気な公衆トイレの向こう側に、なにやらドーム上の白い建物があるようでした。漠然と、しかし確かに、わたしはあそこに行かなければならないと思いました。天啓なんてものではありません。本能です。他者の意思によってではなく、ただ純粋にわたしがあそこに行きたいのです。

それがわたしにとっての救いとなるかはまだよくわかりませんでした。しかし、わたしの心にいきなり舞い降りたこの予感に突き動かされるまま、わたしは再び歩き出しました。

その建物は美術館とかギャラリーの類らしく、建物のそばには主張し過ぎないシンプルな書き込みがなされた看板が立っており、それによると若手アーティストの個展が行われているようで、入場無料などと書かれていますからわたしは安心してやはり真白い扉を開けると、真っ赤な唇に出迎えられました。入り口から五メートルほど歩いたところからホールになるような

のですが、その視界を遮るように通路の中ほどには高さ二メートルほどの白いパネルがあり、そこに女のものと思しき血のように赤い紅を塗った唇が口角を少し吊り上げた形で、その存在感／視覚的効果をぼやかさぬようパネルに溶け込むようなシンプルな白い額縁に収められていました。背筋に寒いものを感じたわたしはそのパネルの脇をすぐに通り抜けてホールへと向かいました。

この建物は外観を見る限りギャラリーとしては小さく見えたのですが、中は天井が通常の二階分の高さまであり、広く感じられました。

この個展を開いている画家は、体をパーツ単位で採り上げて描いている作品が多くありました。唇、舌、指、脚、そのどれからもなんとも言えない雰囲気が伝わってきて、わたしはこの場所が段々息苦しいものに感じられるようになっていました。ここはわたしが求めていた場所ではないのかと少々の落胆を抱きながらそれでも未練がましく絵を見て回っていると、一枚の絵に目が留まったのです。

真っ赤なマニキュアが塗られた女の手が男の背中に回されているのが描かれた絵の隣、その一枚だけが二人の男女の全体を捉えていました。どこかの路地裏、切り裂きジャックがいた頃を思わせる時代の街並みをバックに、表通りから洩れる街頭の明かりに照らされているような明度の中、タキシードを着こなした立派なダリ髭を蓄えた紳士が、グラマラスな体の上に少女のような顔を乗せた女性の男性器を口で愛撫している絵でした。その女性のうっとりと快感に身を委ね、どこまでも陶酔しきった表情にわたしは胸の奥底になにやらもやもやとしたものを抱えながらもその場を動くこともできず、彼女たちの営みに見とれるばかりでした。

「その絵を気に入ってくれたのですか？」
背後からの声に驚きながらも、一瞬で振り向くようなことはできず、棒立ちになってしばらく後に、やっとゆっくりと首をひねって後ろにいる声の主の姿を求めたのでした。
年の頃は二十をやっと過ぎたくらいでしょうか。病的なまでに細く白い肢体に水色のワンピースを纏った女性が立っていました。身長はわたしよりも、いいえ、おそらく平均的な女性の身長より高く、伏目がちに小首を傾げながらわたしをその切れ長な目で見つめていたのです。
「あ、気に入ったというか、なんて言うか、気になって」
ええ、そこにポジティブな感情などありませんでした。ただ、怖いもの見たさとでも言うか、自分の心が拒絶しているのを理解しながらも、どこかではそれを求めてもいるのです。答えてから、ふと気付きました。「あなたが、この絵の？」女性はゆっくりとうなずくとわたしに視線を合わせてきました。射竦められたように、わたしはその目を見返したまま動けなくなり、彼女の瞳の中に映る己の姿を凝視していました。「ええ、この絵、というよりかここにある絵のね。ふふっ、でもなによりもまずこの絵の作者であるということが一番大事ね、あたしにとっては。色々描いてはきたけれど、彼らがあたしにとっては一番の宝物ですものね」「彼ら」その表現の仕方が、ただの作品への愛着というものを超えた、現実に生きる生命へ向けられた言葉のように感じられ、わたしはその言葉の感触を自分の口で転がすことで確かめてみました。「ええ。紹介するわ。彼らの名はトニーとアリス。トニーはとっても情熱的な紳士で、アリスはとってもチャーミングな売春婦なの」彼女はわたしから視線を外し、後ろにかかるトニーとアリスの姿を見つめました。金縛りのようになっていたわたしも後ろを振り返ると、薄暗い中に浮かび上

がるその姿は相変わらずで、退廃的というか、背徳的というか、なんと表現すればいいのかもわからない、ともかくなにやらどろどろとしたものが漂う中で、快感の時間が永遠に停滞した世界に留まり続ける彼らにわたしは羨望と言うべきか、なにかしらの劣等的な感情を抱き、そんな感情を彼らに対して抱くということが自分でもどうにも信じられず、しかし、わたしの中に居座るわけのわからない感情はわたしをこの場に縛り続けるのです。

また、下腹部になにかがざわざわと蠢く感触がしました。体内に蟻が湧き出たようなその感覚に今朝の光景がフラッシュバックし、わたしが人間であるという唯一の救いが揺らいでいきました。わたしは一体どうすればいいというのでしょうか。人間であるという誇りさえも失われかけている中でわたしになにが出来るというのでしょう。支えが失われたわたしが縋れるものはもう後ろに立つ彼女だけだという事実がわたしに強い不安と、彼女に対する祈りや懇願といった感じの強い希望を抱かせるのでした。

「彼らに会ってみたくない？」そっと両肩に手を添えられわたしはびくん、と身を震わせました。もう一度彼女のほうに振り返るのもなぜだか無性に恐ろしく、わたしは壊れたおもちゃのようにその場で首をかくかくと上下に動かすことしかできませんでした。

こっちよ、という彼女の声に慌てて後を付いていきました。そんなわたしの姿を見て心配になったのか、彼女は手を差し出してきました。恐る恐るわたしも手を伸ばすと彼女はわたしの手を取り指と指を絡めて、しっかりと握りしめました。互いの体温の違いがゆっくりと中和されていくのを掌に感じながら、展示スペースのはずれにある照明の灯っていない薄暗い通路の前にやって来ました。通路の奥には扉があり、先ほどの言葉の意味を考えると、わたしたちが

さっきまで見ていたトニーとアリスの絵は複製画とかそう言ったコピー品で、ここが本物の絵を保管している倉庫かなにかかと思っていると、「静かにね。あまりうるさくすると怒らせちゃうから」声を潜めてそう言うと彼女は猫のように音を立てることなく優雅に扉の前まで歩きました。わたしもそれに倣ってゆっくりと扉の方まで向かうと、辿り着いたときには彼女はその扉をわずかばかり開け、中の様子を窺っていました。わたしに気付くと、体の位置を少しずらしてわたしに部屋の中を見せてくれました。

部屋の中には確かにトニーとアリスがいました。確かな肉体を持った二人が交わり合っていたのです。トニーはアリスの男性器に舌を絡ませながら空いた手は彼女の内腿を愛撫して、アリスはその快感に身悶えし、絵の中では綺麗に撫で付けられていたトニーの髪を掴みぐしゃぐしゃと掻き乱していました。押し殺したような吐息交じりの喘ぎと水音が部屋の中に静かに響いていました。トニーの口元からは粘性の液体が床に垂れ落ち、部屋全体からどことなく生臭い臭いが漂ってくるのです。

「ねえ、美しい光景でしょう？」わたしの両肩には再び彼女の手がかけられ、耳元には彼女の吐息がかかるのでした。振り返らずとも彼女が今どんな表情を浮かべてこの部屋の様子を見ているのかわかる気がしました。「彼女たちの姿を見るとね、描かずにはいられなくなったの。貴女ならわかってくれるでしょ？　あたしの気持ち」首筋になにかが這うのを感じました。それはやがてわたしの首筋を這い上がり、今一度わたしの耳に吐息を吹きかけながらぴちゃぴちゃと水音を響かせるのでした。

見えるのは薄暗がりの中、両性具有の売春婦に奉仕する紳士の姿。聞こえるのは遠近双方か

らステレオに響く吐息と喘ぎと水音。そして、生臭い臭い。
ああ、なんなのだろうこれは。やはりわたしはあの非現実的現実からは脱出することはできなかったのか。生まれ変わってはいなかったのか。救いを求めるように目を閉じてみても耳を弄ぶ感触もなにも消えることはありませんでしたが、諸々の音が混ざり合う中で彼女が何事かを囁いてきました。
あら、そんなこと、ぴちゃ、んっ、ないわよ、ちゅる、んふうっ、あなたはこの、ちゅっ、はあっ、現実の中で、ちゅっちゅっ、んぅあっ、生きていけるんだから、ああっ、ちゅっ、ちゅる。
なにそれ。ああ、生臭い。

冬の寒さがわたしを起こしてくれました。くしゃみとともに覚醒したわたしは鼻水をすすり、両腕をさすりながら辺りを見回しました。わたしは通っていた小学校の近所にある公園のベンチで眠っていました。日はもうすっかり傾き陽光は赤くわたしを照らしていました。あの建物からどうやってここに来たのか、そもそも自力で来られたのかもまったく思い出せません。最後の記憶を辿ろうとしたものの、空白が埋まることはありませんでした。記憶に残るのは彼女のあの言葉だけでした。わたしは、この狂っているとしか思えない現実の中で生きていける。生まれ変わったというあの瞬間のわたしの実感を確固たるものにするためにも、わたしは挑まなければいけないことを悟りました。あの家に行こう。帰るためでも、逃げるためでもありません。

この公園からの帰り道は体が覚えていました。もしかしたら目を瞑っていても帰ることが出来たのではないでしょうか。ただ、あの頃よりもほんの少し歩幅は伸びて、それがわたしを混乱させてしまうかもしれないけれど。

目が沈み街灯が点いた頃に、わたしは家の前までやって来ました。家の前には蟻人形が立っていて、わたしはやはりこの現実からは逃れられないことを実感し、挑む決意を新たにしました。もう、恐ろしさなどありませんでした。ただ、母が、母であったものがその己の醜い姿をこうやって外に曝け出しているという事実がとても恥ずかしく感じられました。わたしに気付いて「まあ、今までなにをしてたの？　学校からも来てないって連絡があったし、心配したんだから」と、声を大袈裟にひっくり返して話すその姿がわたしを苛立たせるのでした。蟻人形の声を無視してその脇を通り抜けると、「ねえ、聞いてるの？　お父さんにもちゃんとお謝りなさい。仕事を途中で抜けて貴女をずっと探してたんだから」言葉の端々に色々と引っかかるものを感じながらも、わたしは父の書斎に向かいました。三回ノックすると、中から鍵が開けられる音がしました。中から現れた父もやっぱり相変わらずカマキリで、表情は読めないけど「おお、お帰り。心配したんだぞ。まあ、とにかく入りなさい」と優しい声色で出迎えてくれました。書棚の脇に置かれているクッションが効いたやわらかいラブソファに座り、置かれていたクッションを抱きしめると、日向の匂いがして、心が落ち着くような気がしました。父はパソコンの置かれた机に背を向けるように椅子を反転させ、わたしと向かい合う形で座って、しきりに鎌の切っ先同士を擦り合わせていました。

「怒らないの？」しばらくの沈黙に堪りかねてわたしは聞きました。父は鎌の動きを止めわた

しをじっと見つめ、「父さんが怒ることなんてないよ。ただ、お前になにがあってこうなったのか、父さんはどうしたらいいか、聞いてみたいんだ」優しさと弱さが入り混じるその姿に、わたしは嬉しくも悲しくもなり目の端に涙を溜めて父の膝元に縋るように抱きつきました。原因はわたしの中になどありません。あなたたちの変化がわたしをもここまで変えたのです。そう言える筈もありませんでした。

父は、鎌の峰でわたしの背中をゆっくりとさすってくれました。そしてわたしを抱き起こして、向かい合って立ちました。わたしの背中に父の鎌がゆっくりと回されて、抱きしめられようとしているのを察して、わたしも父の背に手を回し、己の身を預けました。しかし、ぷつっ、と無慈悲にも父はわたしを傷つけることとなってしまいました。父がわたしを愛してくれていることを実感することで、わたしの血が、制服を、体を、汚していくのです。それでも父はわたしを離そうとはしませんでした。そして、わたしも父と離れようとはせず、初めて感じる父からの愛情というものを貪るように受け取ろうとしました。何度も何度も父がわたしの体を傷つけるうちに、わたしの全身はかさぶたで包まれて父さえも拒むようになってしまいました。そしてかさぶたの繭の中でわたしはどろどろに溶けて、今までわたしの世界を構成していた色々なものが入り混じり、複雑に絡み合っては分散し、再びわたし自身が構築されていくのを感じました。

ぱりん、と部屋の外でなにかが割れる音がしたのを合図に繭は罅割れ、わたしはそこから再び光の下へと出たのです。床を見れば父は昆虫大に小さくなっており、そしてわたしは、蝶に

なっていたのです。